

# ウィルマ・マンキラー Wilma Mankiller

## 現在、過去、未来をつなぐ人 Bridging the Past, Present, and Future

石井泉美  
ISHII Izumi

### はじめに

アメリカ・オクラホマ州北東部に位置する14の郡にまたがる地域にチェロキー・ネイションは存在する。1985年12月14日、そのネイションに女性のプリンシパル・チーフが誕生した。ウィルマ・マンキラーである。3期目を半ばに内務省インディアン担当副長官への任命を受けたロス・O・スイマー(Ross O. Swimmer)の後を引継ぎ、チェロキー・ネイション憲法(1976年)の規定に基づいて副チーフからの昇格を果たしたマンキラーは、その後2度の選挙を勝ち抜き、1995年までの10年間、チェロキー・ネイションの舵取りを任されることとなる。<sup>1</sup>

1993年にマイケル・ウォリスとの共著で自伝 *Mankiller: A Chief and Her People* を発表すると、彼女はの中で、自身の誕生からプリンシパル・チーフ就任までの30数年間について多くを語っている。<sup>2</sup> またチェロキー・ネイションの要職に就いた1980年代以降は全国的にも注目を集め、様々な媒体に取り上げられてきた。しかし、その情報一つ一つが日本のアメリカ先住民研究者の中で広く共有されてきたとは必ずしも言えない。本稿では、彼女の半生を順を追ってたどることからまず始めたいと思う。彼女の半生をたどることは、単にチェロキーの一女性の半生をたどることに留まらない。また彼女がこれまでたどってきた道は、いわゆるチェロキー・エリート層のたどってきたそれとも違う。むしろ第二次世界大戦後のアメリカで、その日その日

を懸命に生きてきたチェロキーたちのそれと、より自然に重なり合うのではないだろうか。と同時に、彼女の半生は、同時代を生きるアメリカ先住民が共通に経験した困難や苦悩、喜び、また完全同化から自決権行使の容認へと、その政策を変えざるを得なかった連邦政府の姿をも映し出してくれるのではないだろうか。いつ如何なる時もチェロキーであり続けるマンキラーの半生が、彼女自身のこれまでの歩みであると同時に、チェロキーをはじめとする先住民の人たちにとっての現代史ともなり得るのかどうか、それを考察するのが本稿の目的である。

## 1. マンキラー・フラッツ

ウィルマ・マンキラーは、チェロキーを両親に持つ父チャーリーと、オランダ、アイルランドの血を引く妻アイリーンの三女として、1945年11月18日、この世に生を受ける。上にはすでに5人の兄姉がおり、後に5人の弟妹が生まれる大家族の中で、マンキラーは11人兄弟姉妹の真ん中として成長することとなる。<sup>3</sup>

マンキラーが家族と共に幼少期を過ごした通称「マンキラー・フラッツ (Mankiller Flats)」は、オクラホマ州アデア (Adair) 郡ロッキー・マウンテン地区にある。チェロキー・ネイションはかつて、1907年のオクラホマ州誕生を目前に部族解体を余儀なくされたという歴史を持つ。他のアメリカ先住民同様、長い間共同で所有してきた部族の土地を個人所有化し、部族民をアメリカ市民として合衆国に同化させることを目的としたドーズ委員会が1893年に設置されると、5年後のカーティス法成立を待って、一家の大黒柱である男性家長への土地割当が始められたのである。その過程でマンキラーの父方の祖父ジョンが受け取った160エーカーの土地が、マンキラー・フラッツであった。<sup>4</sup>

マンキラーの両親は、共にオクラホマ州アデア郡に生まれ育った。幼馴染であった2人が結婚を決めたのは、チャーリー21歳、アイリーン15歳の時である。娘の結婚相手がチェロキーの男性であることがわかるとアイリーンの母は断固反対の声を上げたが、2人はバプティスト教会で式を挙げ新婚生

活をスタートさせている。その後の関係修復にはある程度の時間を要したが、それでも娘が誕生すると母方の祖母の名前をミドル・ネームに「ウィルマ・パール・マンキラー」と名付け、それにマンキラー自身も、十代の精神的に不安定な一時期を両親の下を離れこの祖母と共に過ごしている。<sup>5</sup>

マンキラー・フラッツでの暮らしは決して楽ではなかった。大家族を収容するには手狭な、4部屋のみトタン屋根の家は、父と長兄が親戚の手を借りて建てたものである。電気は引かれておらず明かりは石炭油のランプのみ、また飲み水は家から400メートルほど離れた所にある泉で汲んでこなければならなかった。<sup>6</sup> この時代、アデア郡において定職を持つものは少なく、現金が手に入る仕事といえば、線路の枕木や電信柱として使用する材木を切り出すことぐらいであった。小銭を稼ぐため、両親と兄弟たちは材木を切り出しに森へと向かい、また畑ではイチゴやピーナツを育てた。その日暮らしを余儀なくされた気の毒な一家と他人の目には映ったかもしれないが、マンキラー自身、「テーブルの上には、いつも何かしら食べるものがあり」、「ひもじい思いをした覚えはない」と回顧しているように、マンキラー一家の食卓には、野生の豚やリス、鳥、魚、ザリガニ、また家庭菜園で育てた野菜に加えタンポポやヤマゴボウ、ベリー類、そして拾い集めてきた木の実など、バラエティーに富んだ食事が並んでいた。<sup>7</sup>

しかしながら、これだけの大人数を抱える一家の家計が苦しいという事実には変わりなかった。実際、マンキラーと8歳違いの長兄ドナルドは、父と共に家計を支えるため、8年生を終えた時点で学校をやめている。夏になると、2人は毎年近所のチェロキーたちと共に、コロラドまで出稼ぎに行っていた。彼らのためにハウキモロコシ農家が手配したバスや車に乗って、収穫の手伝いへと行くのである。朝から晩まで働いても1日10ドルほどにしかならなかったが、それでも、ひと夏働き終える頃には、家族のために必要なものを買ってやるだけの金は十分にできた。オクラホマでは新年度の開始時期が少し早く、8月初旬には学校が始まっていたため、子供たちは使い古しの靴をはいて登校しなければならなかった。幼いマンキラーは不満に思っていたようであるが、それでも父と兄がコロラドから帰ってきてプレゼントしてくれる新品の革靴と冬服は最高の贈り物であったのである。<sup>8</sup>

一家の暮らし向きがよくなる兆しは一向になく、60人の子供たちが通う小学校への道すがら出会うご婦人たちから言われる「神のご加護がありますように」という言葉には辟易していた彼女であるが、そうした幼少期の記憶を打ち消してくれたのが、両親、そして親戚縁者の大人たちの大きな愛であった。<sup>9</sup> 親戚や知人を訪ねることが一大イベントであった時代に、中でもマンキラーが楽しみにしていたのが、父の異父姉ジェンシー・ハミングバード (Jensie Hummingbird) のもとを家族みんなで訪ねることであった。父の運転する1949年型の黒のフォードで向かった先には、木綿の手作りドレスに身を包んだ、小柄な黒髪のジェンシー伯母さんが待っていてくれた。チェロキー語を十分には操ることのできない子供たちと、英語を解しない伯母ではあったが、その間に立派に会話は成立した。伯母が自分たちのことを大好きでいてくれることが伝わるだけで十分であったからである。<sup>10</sup> その他マンキラーにとって印象深いのは、父方の親戚マギー・ゴード (Maggie Gourd) の、教訓を交えながらも面白おかしいたくさんのお話であった。<sup>11</sup> そうした大好きな人たちの住むオクラホマを離れ、遠くカリフォルニアへ行くことを一家が決心したのは、マンキラー10歳の時であった。

## 2. 現代版「涙の旅路」

第二次世界大戦後のアメリカで、経済的困窮に苦しむアメリカ先住民はマンキラー一家だけではなかった。先住民の多くが同じような問題を抱えていたのである。これに対して連邦政府が出した切り札が「再配置」政策であった。雇用機会の豊富な都市部へと先住民を送り込み、そこでの生活のお膳立てをすることで経済的自立を促すことは、彼らの多くが抱える失業問題を解決するだけでなく、これをきっかけに先住民が故郷とのつながりを絶ち、主流社会への同化を積極的に行うことにつながると連邦政府は踏んだのである。<sup>12</sup>

大家族を抱えるマンキラー家にとって、日々の暮らしに追われる状態から抜け出す方策はあまり残されていなかった。出発の1年前、1955年には、マンキラーの父とインディアン局職員との間で最初の話し合いが持たれている。その後も何度か職員が一家を訪ねてきており、最終的には父、母、長兄

の3人の間で家族会議が行われることとなった。話し合いに加われなかった下の子供たちは皆寝室に隠れ、ドア越しに3人の話を聞こうと必死に聞き耳をたてた。その時のことをマンキラーは今でもよく覚えていると言う。オクラホマを離れることはすでに決まっていたらしく、彼らは引越し先について話し合いを続けていた。最後には、家族の中で誰よりも生まれ故郷を離れることに反対していた母アイリーンが、サンフランシスコならばと意を決した。彼女の母が夫を亡くした後オクラホマを離れ再婚相手と暮らしていた町リバーバンクが、そこから東へ90マイルほど行ったところにあったからである。<sup>13</sup>

毎年コロラドまで出稼ぎに出ていた父と長兄を除いて、遠出らしい遠出をしたことのあるのは母アイリーンのみ、それも隣州のアーカンソーという一家の中で、マンキラー・フラッツを離れることに最後の最後まで抵抗したのは10歳になるマンキラーであった。行動範囲が「家から半径10マイル」でしかなかった10歳の少女にとって、マンキラー・フラッツを離れ見知らぬ土地へと向かうことは、どうにも耐え難いことであったのだろう。<sup>14</sup>「私も幼い時にあの涙の旅路を経験しました。誰も私や私の家族に銃を向けたり、無理やり力づくで行かせようとしたりしたわけではありませんが」と、マンキラーは自伝の中で記している。<sup>15</sup>

「昔々、あの涙の旅路での子供たちがそうであったように、私は何日も泣き続けました。あの涙は、私の心の奥深くにあるチェロキーの部分から流し出された涙なのです。あの涙は私の歴史、私の部族の歴史から生まれた涙、そう、あれはチェロキーの涙だったのです。」と自伝に書き綴っているように、1956年10月、その道中子供たちが皆泣き続ける中、マンキラー一家は丸2日列車に揺られようやくサンフランシスコに到着した。現地のインディアン局職員から必要経費を受け取ったはよいが、すぐにも新生活をスタートさせたい一家にとって、彼らを迎え入れる家は用意されておらず、2週間もの間市の繁華街テンドーロイン (Tenderloin) 地区でのホテル住まいを余儀なくされてしまう。結局、大都会サンフランシスコで一家を迎えてくれたのは、快適な家でも穏やかな暮らしでもなく、目に眩しいネオンと派手な衣装に身を包んだ女性たち、いつまでも騒々しい通り、そして警官隊と一晩中鳴り続ける救急車のサイレンの音でしかなかった。<sup>16</sup>

インディアン局が一家のためによく用意してくれたアパートは、労働者の町ポトレロ・ヒル (Potrero Hill) 地区にあった。父親はロープ製造工場で働き始め、週に 48 ドル稼いだが、それでも一家がサンフランシスコで暮らすにはまだまだ足りず、長兄のドナルドもいっしょに働くこととなった。近所にはメキシコからの移民家族が多く暮らしており、マンキラーは自転車やローラースケートの乗り方、そして電話のかけ方を彼らから教わった。<sup>17</sup>

都会生活の中で、マンキラーがいつまでたっても好きになれなかったのが学校である。5年生に編入した彼女を待ち構えていたのは、クラスメートの好奇の目であった。出席を取る度にどこからともなく笑いが起こる教室で、彼女は朝から憂鬱であった。チェロキーの中では珍しくも何ともなく、むしろ長い歴史の中で皆に親しまれてきたこのマンキラーという名前は、元々は村を守る戦士に与えられた称号であると言われており、チェロキーの間ではちょっとした自慢にもなるあこがれの名前であったのだが、チェロキー以外の子供たちにとっては奇妙な名前以外の何物でもなかった。<sup>18</sup> さらに服装やオクラホマ訛りをからかわれると、その訛りを直すために毎晩本を声に出して読む練習をすることがマンキラーと妹のリンドの日課となった。<sup>19</sup>

1年後、父と長兄の頑張りで一家に小さな家を手に入れるための頭金が用意できると、家族はサンフランシスコ郊外のデイリー・シティー (Daly City) へと引っ越した。ごみごみしたポトレロ・ヒルを離れ、一家がやっと落ち着いた暮らしを始めることのできた場所とあってよいであろう。しかし、マンキラー自身は転校先の学校も好きになれなかった。自分のことを「宇宙かどこかから来た」子のように扱うクラスメートを前に、いつまでもクラスに溶け込めずにいたマンキラーの憂鬱は、7年生に上がるのを前に頂点に達した。<sup>20</sup>

未だ都会生活になじめず精神的に不安定なマンキラーをよそに、長兄ドナルドはチョクトーの女性を結婚相手として家族に紹介する。父と共に家計の担い手であった兄を失うことに家族が不安を強める中、誰も自分のことを気遣ってはくれないのだと感じたマンキラーは家を出る。向かった先は母方の祖母の家であった。子守をして貯めた小銭を握り締め、バスで祖母の住むリバーバンクへと向かった孫を、祖母は温かく迎えてくれた。そして両親に電

話をし娘の無事を知らせてくれた。すぐに迎えの車が来て家に連れ戻されたが、マンキラーはその後も祖母の家への家出を繰り返している。万事休すとはかりに両親は祖母に娘の面倒をみてくれるよう頼み込み、マンキラーは8年生への進級を前に祖母の下へと移っている。<sup>21</sup>

祖母は息子夫婦と共にリバーバンクの農場で暮らしていた。マンキラーは祖母と寝起きを共にし、マンキラー・フラッツを思い起こさせるような環境の中で徐々に自分を取り戻していった。近くにオクラホマ州出身の家族が大勢住んでいたことも助けになったようである。1年後には両親の下へと戻るが、その後も夏休みは祖母の農場で過ごすことがマンキラーにとっての楽しみとなった。<sup>22</sup>

母方の祖母と共にマンキラーを不慣れな都会生活から救ってくれたのが、サンフランシスコ・ミッション地区にあるサンフランシスコ・インディアン・センターであった。そこには、マンキラーと同じように様々な思いや不安を抱えそれを共有してくれるアメリカ先住民たちが大勢いた。中学から高校へと進み、先の見えない将来に不安を感じていたマンキラーにとって、インディアン・センターはまさしく心の「オアシス」であった。<sup>23</sup> マンキラー一家にとっても、そして一家と同じような境遇の中、都会へと出てきた先住民たちにとっても同じことが言えた。そして、このサンフランシスコ・インディアン・センターで芽生えた汎インディアン意識が大きくなるとなって時代を変えていくのは、もう間もなくであった。

### 3. 「良き母」、「良き妻」からインディアン活動家へ

「高校時代の思い出といえるものはあまりない」と言い切るマンキラーが、放課後立ち寄るインディアン・センターで得ることのできた心の平安を頼りに高校へ通い続け、無事卒業を迎えたのは1963年6月のことであった。卒業を機に彼女は家を出て3歳上の姉フランシスとの共同生活を始め、金融会社で働き出した。<sup>24</sup>

高校を卒業し晴れて社会人となった17歳のマンキラーは、ある日1人の男性と出会う。その人の名はヘクター・ヒューゴー・オラヤ・デ・バルディ

(Hector Hugo Olaya de Bardi) であった。エクアドル出身で、サンフランシスコ州立大学に通う4歳上のヒューゴーを、「典型的なラテン系、それも品の良い」、「洗練された」、スマートな男性であるとマンキラーは感じた。それもそのはず、ヒューゴーの父は医師、そして母はイタリアの旧家の出身であった。夏の間デートを重ねた2人は、ヒューゴーの猛烈なアタックもあり結婚を決意する。マンキラーの両親は難色を示したがオラヤ家からの反対はなく、1963年11月13日、2人はネバダ州リノ(Reno)で式を挙げる。<sup>25</sup> マンキラー18歳の誕生日の5日前のことであった。<sup>26</sup>

「ウィルマ・オラヤ」となった妻に夫ヒューゴーが望んだことは、オラヤ家の良き妻、そして良き母になることであった。<sup>27</sup> マンキラーは結婚後も仕事を続けたが、翌年1月には第一子の妊娠がわかる。加えて、父方の祖父や父からの遺伝で、自分自身にも腎臓に疾患があることが判明した。新しい命の誕生を告げられてまずは驚き、そして困惑したマンキラーであったが、同時に発覚した腎臓の病気は、それからしばらくすると、彼女を長年苦しめることとなる病魔へと発展する。<sup>28</sup>

ヒューゴーは、学業の合間を縫って夜はパン・アメリカン航空で働きながら一家の家計を支えた。<sup>29</sup> 1964年8月11日には長女フェリシアが、その2年後には次女ジナが誕生する。一家を支えなければならないという使命感と経済的負担がヒューゴーの肩に重くのしかかっていたとするならば、それと同様に、マンキラーには完璧な妻と母になることがこれまで以上に強く期待されていたのである。<sup>30</sup>

夫のヒューゴーは、妻が息抜きにインディアン・センターへ行くことも実家に立ち寄ることも快く思わず、一切を禁じようとした。<sup>31</sup> マンキラーと結婚することで彼女を救ってあげたのだと感じていたヒューゴーは、自分が妻の「救世主」でなくなることが不安でしょうがなかった。<sup>32</sup> しかし、そうした夫の考え方にマンキラーが疑問を抱くのに時間は要しなかった。結婚から3年もすると2人の歯車は狂い始めた。これからもずっと操り人形のように夫の言うことだけを聞いて生活していく人生で、果たして自分は幸せなのだろうかマンキラーは考えるようになる。そして、彼女が出した答えは「『ステップフォードの妻』なんて後々呼ばれるような、そんな女性になりたくない



いわ」であった。<sup>33</sup>

現状を打破するためにマンキラーがまずとった行動は、大学へ通うことであった。学校にはよい思い出などないマンキラーではあったが、スカイライン短期大学でいくつかクラスを履修し自信をつけると、ついには大学で学ぶことを真剣に考え始める。インディアン・センターでの出会いから10数年来の友人の勧めもあり、彼女はサンフランシスコ州立大学への入学を果たした。夫が決めた狭苦しい範囲の中でしか行動できない籠の中の鳥は真っ平ごめんと思っていたマンキラーと夫との溝は深まるばかりであった。<sup>34</sup>

そんな最中、結婚以来すっかり足が遠のいてしまっていたインディアン・センターが火災に遭うという事件がおきる。これまで、全米各地からサンフランシスコへやって来た先住民たちを慰め励まし続けたセンターが焼失してしまったのである。臨時のセンターがすぐに別の場所に設けられたが、この火災事件をきっかけに、サンフランシスコでついに汎インディアン運動の口火が切られた。1969年11月9日、学生を中心とした15人の先住民がサンフランシスコ湾に浮かぶアルカトラズ島を一晩占拠することに成功すると、11月20日には、70名の学生を含む計89名の先住民がボートで島へ渡り、19ヶ月に及ぶアルカトラズ島占拠がここに始まったのである。<sup>35</sup>

島を訪れ占拠に加わる先住民が数多くいたが、その中にはマンキラーの4人の弟妹も含まれていた。マンキラー自身は島を訪問してもそこに留まることはなかったが、度々訪れては皆を激励している。「アルカトラズが私を永久に変えた」と回顧しているように、この占拠をきっかけに、マンキラーの中でインディアン活動家としての意識が芽生え、インディアン・センターで過ごす時間が日に日に長くなっていった。<sup>36</sup>

アルカトラズ島の占拠がまだ続く中インディアン・センターでの活動を理解されずに夫との距離が大きくなっていったこの時期に、父チャーリーがこの世を去った。そして、父の死から何とか立ち直ろうと懸命に努力している時に、自分も父と同じ多発性嚢胞腎を患っていることを知る。<sup>37</sup> 様々な不安を取り払うかのように、彼女は汎インディアン活動に没頭した。アルカトラズ島占拠に加わった先住民たちの多くがそうであったように、マンキラーはボランティアとしてピット・リバー・インディアンの土地返還運動に加わり、

5年弱の期間を彼らと共に闘っている。条約や国際法などの法律に明るくなり、助成金を得るためのノウハウを習得することができたのは、すべてここでの経験があつたことだった。<sup>38</sup>

身体の続く限り様々な活動に携わりたいと考えていたマンキラーにとって、一番の悩みは足がないことであつた。どこへ行くにも夫の許可が必要であつた。ついにマンキラーは実力行使に出る。夫には一言も言わずに共同名義の預金口座から金を引き出し、新車のマツダを購入したのである。<sup>39</sup>

今や完全に行動の自由を手に入れたマンキラーは、カリフォルニアのみならず、オレゴンやワシントン州にまで活動の範囲を広げていく。夫ヒューゴーとの別れは決定的となつた。1974年、マンキラーは離婚を切り出した。夫はなかなか首を縦に振ってはくれなかったが、最後には彼女の要求を呑まざるを得なかった。彼女がウィルマ・マンキラーに戻つた瞬間であつた。<sup>40</sup>

#### 4. 帰郷

離婚後すぐにもオクラホマに帰りたかつたマンキラーの前に立ちはだかつたのは、元夫ヒューゴーであつた。彼は、サーカスに連れて行くと言って次女のジナを連れ出したきり帰つて来ず、1年もの間自分の下に置き続けたのである。マンキラーに復縁を迫るには、これが一番の方法と考えたのだつた。<sup>41</sup>

ようやく娘を取り戻したマンキラーは、娘2人と共になつかしいマンキラー・フラッツへ帰ることを決意する。まずは、1976年のひと夏を、予行演習として都会暮らししか知らない娘たちと共にオクラホマで過ごし、翌年の夏には完全に田舎に引っ込んだ。<sup>42</sup> あの「涙の旅路」から20年という歳月が経っていた。

一家がサンフランシスコへ発つた後も、父チャーリーは祖父から受け継いだ土地をずっと手放さずにいてくれた。あの4部屋しかなかつた手作りの家は火事でとくに焼け落ちてしまつていたが、土地はまだマンキラー家のものであつた。<sup>43</sup> そのマンキラー・フラッツにもう一度家を建てようとアデア郡の裁判所に確認に行った時、彼女はこんな言葉を耳にする。近くで井戸端会議をしていた長老が発した「あれはジョン・マンキラーの孫じゃないかい」

という言葉であった。その言葉を聞いた時、マンキラーは本当に故郷に帰ってきたのだと実感したそうである。<sup>44</sup>

マンキラーが帰郷したのは、チェロキーが自分たちのネイションを再建してまだ間もない頃であった。部族解体前に部族民で選出した最後のプリンシパル・チーフ、ウィリアム・C・ロジャーズ (William C. Rogers) が1917年に死去すると、それ以降アメリカ合衆国大統領がその任命権を握り続けた。再び自分たちの手でプリンシパル・チーフを選ぶことができるようになったのは1971年のことである。<sup>45</sup> 新生チェロキー・ネイションとしての活動の始まりであった。<sup>46</sup>

カリフォルニアでの経験をチェロキーのために生かしたいと考えていたマンキラーは、チェロキー・ネイションの求人広告を見つける度、首都タレクウワ (Tahlequah) へと向かった。面接らしきものは受けさせてもらえるのだが、いつも何かしら理由をつけては断られた。最後には「とにかくやらせてください」と直談判をし、1977年10月によく職を得ている。<sup>47</sup>

経済活性化担当という肩書きをもらいチェロキー・ネイションで働き始めたマンキラーではあるが、自分の思い描いていたシナリオを始めから実現できたわけではない。むしろ、チェロキー・ネイションの官僚主義的な仕事の進め方に疑問を抱いている。チェロキー政府の進めるトップ・ダウン方式のプログラムは、彼女がこれまでカリフォルニアで関わってきた草の根活動とは違った。辺りな片田舎に住むチェロキーたちに全く目がいていないと不満を感じたのである。それでも自分のできることに懸命に取り組み残業を厭わず働く姿を、徐々に周囲の人々も認めるようになる。1年後には、チェロキー支援プログラム企画担当として外部資金の調達に携わることになった。彼女が助成金獲得のためにと用意した無数の申請書が、チェロキー・ネイションにおける高齢者や児童に対する福祉の充実、また訪問看護サービスの開始へとつながっていったのである。<sup>48</sup> この間に、マンキラーは大学の卒業資格を得、アーカンソー大学大学院への進学を果たしている。<sup>49</sup>

1979年11月8日、チェロキー・ネイションでの仕事が軌道に乗り学生としても多忙を極めていたマンキラーを、悲劇が襲った。タレクウワへと向かう途中、上り坂で正面衝突事故に遭ったのである。真正面からマンキラーの

車にぶつかってきた対向車は、前の車を追い越そうと反対車線に入ったまま上り坂を上がってきたのだという。重症を負ったマンキラーは、病院に搬送されるや6時間にわたる手術を受けている。その後も集中治療室での治療が続いた。入院は2ヶ月にわたり、その間マンキラーはあわや右足を切断という危機に直面しながらも17回の手術に耐えた。その一方で、対向車を運転していた人物の命は助からなかった。即死に近い状態であったという。マンキラーの友人であった。<sup>50</sup>

その事故から3ヶ月後、まだ肉体的にも精神的にも傷の癒えていないマンキラーの体に異変が起きる。手、指、腕が上手く利かないのだ。立ち上がったもすぐに倒れてしまい、物が二重に見え始め、さらには話すことさえ辛くなった。全身の筋力が衰えてしまう重症筋無力症という病気であった。<sup>51</sup> 重症を負ったあの事故からまだ1年しか経たない1980年の暮れ、彼女は胸腺摘除手術を受ける。その後ステロイド薬投与による治療が始まり5年間の長きにわたった。<sup>52</sup>

それでも手術から間もない1981年1月には仕事に復帰している。マンキラーの働きぶりをこれまでも度々耳にしていた時のプリンシパル・チーフ、ロス・スイマーも彼女の復帰を喜んだ。<sup>53</sup> 復帰後最初に任された仕事はアデア郡ベル地区の復興作業である。人口350人の95%をチェロキーが占めるこの地区は、住民の4人に1人が上水道のない家で暮らすなど、不自由な生活を強いられていた。日常生活に最低限必要なインフラを整備すること、それもチェロキー・ネイションの財政に頼ることなく外部資金を得て、というのが彼女に課された使命であった。ピット・リバー・インディアンとのあの経験がようやく生かされる時が来たのである。政府、民間双方から助成を受けるための書類作成に追われながらも、マンキラーは地元住民との話し合いの場を持ち、ボランティアを募った。最終的には政府、民間合わせて100万ドルもの助成金が集まり、ここに地元住民を巻き込んでのベル・プロジェクトがスタートしたのである。

日常生活に支障を来すほどにインフラ整備の遅れているコミュニティでまず住民たちが取り組んだのは、今にも崩れ落ちそうな20軒の家の補修であった。次に彼らは新たに25軒の家を建てると、一番の懸案事項であった上水

道の整備に取りかかった。14ヶ月かけて住民たちが敷設した水道給水管は全長16マイルにもなった。地域住民の助け合いの精神、そして自分たちの問題は自分たちの手で解決するのだという強い姿勢が、このベル・プロジェクトを成功へと導いたのである。彼らのがんばりをCBS系列の地元放送局が取り上げると、ついには地域住民参加型自立支援策モデルとして7分間のミニ・ドキュメンタリーにまとめられ、CBS日曜朝の90分ニュース番組で全国放送されるまでになった。

マンキラーの信じていた通り、昔ながらの助け合いの精神、互いに手を差し伸べあうというチェロキーの伝統は、チェロキーたちの間にまだまだ根強く残っていた。さらにはこのベル・プロジェクトの成功をきっかけに、自分たちで自分たちの問題は解決すべきであり、また解決できるのだという意識がチェロキーたちの中に根付いていったのである。<sup>54</sup> マンキラー個人にとっても、1年以上のブランクの後に任されたこのプロジェクトの成功は大きな意味を持っていた。オーガナイザーとして共に働いた、後に夫となるチャーリー・ソープ（Charlie Soap）との出会いを、このベル・プロジェクトは取り持ってくれた。<sup>55</sup> さらには、プリンシパル・チーフへの階段を上っていくきっかけを彼女に作ってくれたのである。

## 5. プリンシパル・チーフへの道

1983年の選挙に副チーフ候補としてマンキラーを担ぎ出したのは、3期目を目指していたプリンシパル・チーフ、ロス・スイマーであった。しかし、当初彼の頭の中にあった人物はマンキラーではなかった。2期目の途中でリンパ腫を患い抗がん剤治療で政務を思うように執れなくなっていたスイマーに対して味方陣営からも批判が出始め、腹心が次々と離れていってしまったのである。その後病状の安定したスイマーは出馬することを決めると、マンキラー曰く「男性候補をすっ飛ばして」、副チーフ候補として彼女に白羽の矢を立てたのである。選挙に出ることは「アメリカ議会や、もっと上の位の席を狙うのと同じ」と感じていたマンキラーは、この打診を丁重に断っている。<sup>56</sup> 弁護士であり銀行員でもあったスイマーは、自分がチェロキーのために力を

発揮できるのは、ネイション内よりも首都ワシントンであると考えており、そのためにも自分がプリンシパル・チーフとして連邦政府と掛け合っている間留守を守り、住民たちのために奔走してくれる人を探していたのである。そのような状況下では、マンキラーこそうってつけの人物だと考えたであろうし、擁立されるのに何ら不思議はなかった。<sup>57</sup>

しかし、ひと度選挙戦が始まると、現職チーフの推すマンキラーに対して容赦ない言葉が次々と浴びせられた。曰く「女で民主党でウェスタン・ブーツなんかはいて、副チーフの器じゃないんじゃないか」、曰く「だいたい選挙に出るなんて神への冒瀆なんだよ」と、悪意に満ちた言葉が続いたが、それ以上に手強かったのがチェロキー・ネイション議会の議員たちであった。<sup>58</sup> 15人の議員全員が一丸となって、2度もスイマーに対してマンキラーの擁立を止めるよう迫っている。<sup>59</sup> そして何よりも彼女を悩ませたのは、スイマー陣営の選挙対策委員長ゲイリー・チャップマン（Gary Chapman）であった。<sup>60</sup> その他、時には脅迫電話を受けたり、車のタイヤを4つともパンクさせられたりしながらも、マンキラーは2人のチェロキー議会議員経験者を相手にその選挙戦を最後まで戦い抜いたのである。<sup>61</sup>

選挙の結果、プリンシパル・チーフはスイマーが有効投票数の過半数を獲得し、3回目の当選を果たした。副チーフでは、最高得票数を獲得したのはマンキラーであったが、過半数には達せず、結局アグネス・カウエン（Agnes Cowen）との決選投票へと持ち越された。<sup>62</sup> 最終的にカウエンとの決選投票を制したマンキラーがスイマーと共に就任式を迎えたのは1983年8月14日のことである。<sup>63</sup> 女性初の副チーフ誕生であった。

厳しい選挙戦を勝ち抜いて副チーフに就任したマンキラーは、副チーフ時代を振り返って「大変だった。本当に大変だった」と語っている。<sup>64</sup> チェロキー議会は反マンキラー派で占められており、その議会の議長は副チーフであるマンキラーが務めなければならなかった。彼女は副チーフとして40以上のチェロキー支援プログラムを統括していたが、チェロキー・ネイションの実質的な権限は、やはりプリンシパル・チーフのロス・スイマーにあったのである。<sup>65</sup>

副チーフ就任3年目にマンキラーはプリンシパル・チーフに昇格したが、

それはスイマーが内務省インディアン担当副長官に就任したからであった。スイマーは就任要請を受けた時、マンキラーがチェロキー憲法に則って自分の跡を継ぎプリンシパル・チーフになってくれないのならば、この話は断ると言ったそうである。<sup>66</sup> しかし、スイマーが12月5日にワシントンへ発つ前に引継ぎとして手渡したのは、たった1枚のチェロキー・ネイションの懸案事項がシングル・スペースでタイプされた紙切れだけであった。多忙なスイマーとの引継ぎもままならず、またスイマーの残りの任期を、選挙による信任を得ない形で務めなければならなかったマンキラーがプリンシパル・チーフとして宣誓をし就任演説を行ったのは、1985年12月14日のことであった。<sup>67</sup>

議会と上手く渡り合いながらチェロキー・ネイションの運営をしていくためには、やはり選挙で勝ってチェロキーの人々の信任を得ることが必要だとマンキラーは感じていた。しかし出馬表明一つをするにしても、様々な困難がマンキラーの前に立ちはだかった。まずマンキラーと議会との対立を知っている前任者ロス・スイマーが、選挙に出ても勝つ見込みはないと再三彼女に言って聞かせていることである。<sup>68</sup> また親しい友人たちは寄ってたかつて、副チーフだったから勝てたのであってプリンシパル・チーフとして選挙に出るのは無謀だと言いつつ放った。そのような友人たちがひっきりなしに家にやってくるのを見て、「もう一人同じようなことを言いに来たら、その時には出馬することにしよう」と夫と冗談めかして言っていたら、それが本当になった」と、マンキラーは自伝に書いている。<sup>69</sup> そうした反対を押し切って彼女は立候補したのである。投票日直前に持病の腎臓が悪化し入院騒ぎを起こした時などは、対立候補の攻撃を躲<sup>かわ</sup>すために、自分は健在であると病院のベッドの上から記者会見まで行わなければならなかった。それほど3人の対立候補は皆手強かったのである。<sup>70</sup> マンキラー自身、「最悪の選挙だった」と評しているように、1回の投票では誰も過半数が取れず、決選投票で元副チーフ、ペリー・ウィラー（Perry Wheeler）を破り、ようやく当選を決めている。<sup>71</sup>

これで、名実共にチェロキー・ネイション初の女性プリンシパル・チーフが誕生したと言えるのであろう。ネイション内での評価はこれからという

ところではあったが、対外的には「メジャーなアメリカ先住民部族の中で初めての女性チーフ誕生」のフレーズと共に注目を集めるようになる。当選を果たした半年後には、早くもフェミニスト雑誌 *Ms.* の「1987年今年の女性 (Women of the Year)」の1人に選ばれている。<sup>72</sup> しかし、そうした対外的な評価や注目がマンキラーの政権を支えたわけではない。ネイション内の問題にまず目を向け、チェロキー・ネイションのことを第一に考え行動するチーフだと皆が認めたからこそ、であったのだろう。4年の間にマンキラーは確実に支持を広げ、1991年の選挙では2人の対立候補を寄せ付けず、得票率82.7%という驚異的な強さで再選を果たしたのである。<sup>73</sup>

連邦補助金の使途を、合衆国政府主導ではなく部族側が決定、予算配分できるようなプログラムを連邦政府が試験的に導入した時、それに署名したのも、チェロキー・ネイションにビンゴを導入するという苦渋の決断をしたのもマンキラーである。<sup>74</sup> しかし、彼女がプリンシパル・チーフとしてまず第一に考え力を入れていたのは、自分が手がけたベル・プロジェクトに代表されるような地域開発活性化と医療サービスの充実であった。<sup>75</sup> これら2つの政策は、いずれもマンキラー個人の経験と深く結びついた、彼女の実体験から生まれた政策であったといえる。幼い頃一家でマンキラー・フラッツを離れなければならなかった彼女は、辛い思いをするのは自分たちだけで十分と思っていたのであろう。また正面衝突事故に始まり腎臓の持病に苦しむなど健康面の不安をいつも抱えているマンキラーであるからこそ、チェロキーの人々がいつ病気になっても心配のないよう診療所を設け医療サービスを充実させることがまず大切だと感じていたのだろう。実際、マンキラーは、チーフ在任中も入退院を繰り返している。1990年6月にはボストンの病院で生体腎移植手術を受けている。腎臓を提供してくれたのは長兄ドナルドであった。<sup>76</sup> その3年後にも腹部に痛みを感じ再度手術を受けている。<sup>77</sup>

健康面の不安を拭いきれないマンキラーは、1994年4月、650人のチェロキー・ネイション職員を前に、プリンシパル・チーフの職を今季限りで辞することを発表した。選挙までまだ1年以上もある時点での突然の辞任表明に、涙する職員もいたという。<sup>78</sup>



## むすびにかえて

チェロキー・ネイションの要職を離れた後のマンキラーについて少し触れておきたい。1995年8月、ジョー・バード（Joe Byrd）にプリンシパル・チーフの職を譲ると、翌年の年明け早々には客員教授としてダートマス大学に赴任している。先住民研究、女性学、法学の講義を担当する他、講演なども精力的にこなすはずであった。<sup>79</sup> しかし、2ヶ月もしないうちに体調を崩し主治医のいるボストンの病院に担ぎ込まれている。検査の結果、結腸に悪性リンパ腫が発見された。生体腎移植後服用を続けていた免疫抑制剤で免疫状態が低下した結果でできてしまったものであった。幸い転移はしていなかったが、彼女は長期間抗がん剤治療を受けている。<sup>80</sup> また1998年には2度目の生体腎移植手術が待っていた。今回は姪がドナーであった。<sup>81</sup> さらに翌年1999年には乳がんであることがわかり、2度のがん細胞摘出手術を受けている。<sup>82</sup>

マンキラーは、自分の身体と相談しながらの生活を強いられることになっても精力的に活動し続け、その功績は広く世間に認められてきた。イェール大学、ダートマス大学をはじめとする18の大学が名誉教授の称号を彼女に与えている。<sup>83</sup> さらには1998年、文民に向けた勲章としては最高位の大統領自由勲章（the Presidential Medal of Freedom）を授与されている。<sup>84</sup>

こうして見てくると、病魔との闘いこそがマンキラーの半生であるという印象がまず強く残るであろう。さらには、ありとあらゆる困難に直面しながらもそれを乗り越えチェロキー・ネイションの政治の世界で頂点を極めた初めての女性という、その事実に目がいくことであろう。彼女のその強靱な精神には恐れ入るばかりである。肉体的にも精神的にも人一倍辛い思いをしてきたであろう彼女の、どこにそのパワーの源があるのだろうかと思う。

マンキラーがチェロキー・ネイションで活躍する姿を見て、チェロキーの少女たちは、自分も将来プリンシパル・チーフになれるかもしれないと思ったことであろう。マンキラーの決してあきらめないという姿勢に、自分たちの問題は自分たちで解決していくのだと気持ちを新たにしたいチェロキーも多かろう。しかし過去を振り返ってみると、女性が部族の政治に対して影響力

を行使し男性の側もそれを尊重するという時代が、そして連邦政府の介入を受けながらも自治を行い自分たちの土地を自分たちで守り抜いていこうと必死になった時代が、長きにわたりチェロキーの歴史の中には確かにあったのである。<sup>85</sup> そのチェロキーの過去と現在、そして未来をつなぐ役目を果たしたのが、まさにマンキラーであった。

チェロキーは、19世紀初頭のアメ리카において合衆国政府の「文明化」政策を積極的に受け入れた部族として広く一般に知られている。その「史実」ゆえに、他の先住民たちとは違い、チェロキーは皆が何の問題もなくアメリカ主流社会に適合し安定した生活を送っているのだという誤った見方をされることがままある。しかしマンキラーの半生は、チェロキーも他の先住民と同じように様々な問題を抱え、そしてその問題を解決しようと日々取り組んできているのだということを我々に教えてくれる。その意味で、マンキラーはチェロキーをはじめとするアメリカ先住民の現代史の生き証人であり、彼らの現代史ともなり得るのである。

## 註

<sup>1</sup> The 1976 Constitution of the Cherokee Nation [art. VI, sec. 4, p. 6]。なお、アメリカ合衆国においてインディアン関連事項を担当する責任者の役職名は、1977年にインディアン局局长 (commissioner of Indian affairs) から内務省インディアン担当副長官 (assistant secretary of the interior for Indian affairs) へと変更された。1977年までの歴代インディアン局局长に関しては Kvasnicka and Viola [1979] を参照のこと。

<sup>2</sup> Mankiller and Wallis [1993]。加えて Mankiller [2004] も参照のこと。その他彼女の半生を取り上げたものとして Janda [2007]; Agnew [2001] が、また子供向けには Schwartz [1994] をはじめとする多数の読み物が刊行されている。

<sup>3</sup> Mankiller and Wallis [1993: 31-32]。

<sup>4</sup> Mankiller and Wallis [1993: xvi, xx, 4-5]。1887年、アメリカ合衆国政府は、先住民同化政策の総仕上げとしてインディアン一般土地割当法 (ドーズ法) を制定する。しかし、チェロキーは、その適用を、チカソー、チョクトー、クリーク、セミノールと共に逃れている。この5部族の中でもドーズ法に定められた条項を遂行するために設置されたのが1893年のドーズ委員会であり、5年後のカーティス法制定へと続くのである [Prucha 1984, 2: 659-86, 737-57; Carter 1999]。

<sup>5</sup> Mankiller and Wallis [1993: 9-11, 32, 103-7]。

- <sup>6</sup> Mankiller and Wallis [1993: 32-33]。
- <sup>7</sup> Mankiller and Wallis [1993: 34-35]。
- <sup>8</sup> Mankiller and Wallis [1993: 35-36]。
- <sup>9</sup> Mankiller and Wallis [1993: 36, 37-38]; Mankiller [2004: 99]。このような教会活動に熱心な女性たちを、マンキラー家の子供たちは「“Bless Your Heart” ladies」と呼んでいた。学校までの3マイルの道のりを行く途中車に乗せてもらっても、お下がりの洋服をもらっても、この女性たちのことをどうしてもマンキラーは好きになれなかった。「なんてかわいそうな」という彼女たちの視線から逃れるためにも、彼女たちが家にやって来た時は決まって身を隠していたほどである。
- <sup>10</sup> Mankiller and Wallis [1993: 5, 37, 39]。
- <sup>11</sup> Mankiller and Wallis [1993: 40-42, 44]。
- <sup>12</sup> 再配置政策に関しては、まず Prucha [1984, 2: 1079-84] を参照のこと。なお、この再配置政策が実施されたことによって先住民の都市部への移動が始まったのではない。様々な理由で彼らはそれ以前から都市への移動を始めており、その動きを合衆国政府側が加速、推進したのが再配置政策であったのである。第二次世界大戦後の合衆国における対インディアン政策と先住民の移動、都市生活については Fixico [1986]; Fixico [2000] に詳しい。
- <sup>13</sup> Mankiller and Wallis [1993: 68, 69, 70]。
- <sup>14</sup> Mankiller and Wallis [1993: 70]。
- <sup>15</sup> Mankiller and Wallis [1993: 62]。
- <sup>16</sup> Mankiller and Wallis [1993: 62, 70-71]; Mankiller [2004: 48]。
- <sup>17</sup> Mankiller and Wallis [1993: 72]。
- <sup>18</sup> Mankiller and Wallis [1993: xix, 3, 11-12, 13]。この「マンキラー」という名字は彼女の4代前、高祖父の代から使用されていたことが確認されている [Mankiller and Wallis 1993: 4]。なお、彼女の名字に関してはこれ以外にもエピソードに事欠かない。彼女自身も慣れたもので、話題に上る度、質問をした人物に合わせて丁寧に、また時には冗談も交えて説明をしているようである [Mankiller and Wallis 1993: 13; Verhovek 1993: C10; Colberg 1996]。
- <sup>19</sup> Mankiller and Wallis [1993: 73]。
- <sup>20</sup> Mankiller and Wallis [1993: 102-3]。
- <sup>21</sup> Mankiller and Wallis [1993: 103-5]。
- <sup>22</sup> Mankiller and Wallis [1993: 104, 105-6]。
- <sup>23</sup> Mankiller and Wallis [1993: 111]。
- <sup>24</sup> Mankiller and Wallis [1993: 111, 115, 144-45]。

25. ただし、マンキラーの両親は、娘がまだ若すぎるという理由で反対したわけではない [Mankiller and Wallis 1993: 147]。
26. Mankiller and Wallis [1993: 145-47]。
27. Mankiller and Wallis [1993: 147]。
28. Mankiller and Wallis [1993: 149-50]。
29. Mankiller and Wallis [1993: 149]。
30. Mankiller and Wallis [1993: 150]。
31. Mankiller [2004: 101]; Mankiller and Wallis [1993: 151]。
32. Mankiller and Wallis [1993: 158]。
33. Mankiller and Wallis [1993: 151, 157]; Janda [2007: 87]。ブライアン・フォーズ監督の映画『ステップフォードの妻たち』(*The Stepford Wives*, 1975年)に登場する、夫の言うまま、なすがままに行動する従順な妻たちになぞらえて、マンキラーは自伝の中にこう記している。
34. Mankiller and Wallis [1993: 157-59]; Mankiller [2004: 2]。
35. Mankiller and Wallis [1993: 190-92]; Johnson, Champagne, and Nagel [1997: 25-28]。アルカトラス島占拠というと、この1969年11月20日に始まる、19ヶ月間にわたる占拠をまず思い浮かべるが、実際にはその5年前、1964年3月9日に、5人のスーが4時間にわたり占拠したのが初めである [Johnson, Champagne, and Nagel 1997: 25]。
36. Mankiller and Wallis [1993: 163, 192-93]。
37. Mankiller and Wallis [1993: 198-200]。多発性嚢胞腎とは、無数の嚢胞(水がたまった袋)が腎臓に生じることでその働きを低下させる遺伝性疾患である。日本では難病(特定疾患)の一つに認定されている [難病情報センター、「多発性嚢胞腎」]。
38. Mankiller and Wallis [1993: 203-4]; Mankiller [2004: 82, 84, 101-2]。
39. Mankiller and Wallis [1993: 201-2]; Mankiller [2004: 48-49]。
40. Mankiller and Wallis [1993: 212]。
41. Mankiller and Wallis [1993: 213-14]。
42. Mankiller and Wallis [1993: 214-15]。都会っ子の次女ジナは、母の気が変わってまたサンフランシスコで暮らせないかと思っていたそうである [Janda 2007: 88]。
43. Mankiller [2004: 17-18]; Mankiller and Wallis [1993: 215-16]。
44. Mankiller and Wallis [1993: 216]; Mankiller [2004: 19]; Verhovek [1993: C10]。

45. 初代プリンシパル・チーフにはウィリアム・W・キラー (William W. Keeler) が選出されている [Mankiller and Wallis 1993: 217]。
46. Mankiller and Wallis [1993: 170-71, 177-78, 179-81, 217-18]。
47. Mankiller and Wallis [1993: 216-17]。
48. Mankiller and Wallis [1993: 217, 219]; Mankiller [2004: 50]; Agnew [2001: 213]。
49. Mankiller and Wallis [1993: 219]。
50. Mankiller and Wallis [1993: 219-25]; Mankiller [2004: 148-50]。
51. 父の死後まもなく発覚した多発性嚢胞腎同様、日本では難病 (特定疾患) に認定されている。原因はまだ解明されていないが、発病した患者の 70% に胸腺の異常がみられるという [難病情報センター、「重症筋無力症」]。
52. Mankiller and Wallis [1993: 227-29]; Agnew [2001: 214]。治療の過程で西洋医学に対して感じた葛藤をマンキラーは短編 [Mankiller 1985: 72-76] に著している [Mankiller and Wallis 1993: 232]。
53. Mankiller and Wallis [1993: 233]。
54. Mankiller and Wallis [1993: 233-35]。
55. Mankiller and Wallis [1993: xxiii, 235-36]。2 人は 1986 年 10 月に結婚している [Mankiller and Wallis 1993: 237]。
56. Mankiller and Wallis [1993: 239-40]; Mankiller [2004: 150]。
57. Mankiller and Wallis [1993: 238-40]; Janda [2007: 90-91]。
58. Mankiller and Wallis [1993: 241, 260]。マンキラーは民主党、一方スイマーは共和党を支持していた。特に、マンキラーよりも世代が上のチェロキーの中には共和党支持者が多い。リベラな民主党、保守的な共和党、という一般的な対比に加え、そこにはチェロキー特有の理由があった。インディアン強制移住法 (1830 年) を成立させ、自分たちの祖先を西へと追いやった、あのアンドリュー・ジャクソンを輩出した民主党を支持する気にはなれないというのが最たる理由である [Mankiller and Wallis 1993: 112]。
59. Mankiller and Wallis [1993: 260]。
60. Mankiller [2004: 150-51]; Janda [2007: 91-92]。
61. Mankiller and Wallis [1993: 241-42]; Mankiller [2004: 151]。
62. Janda [2007: 92-93]。マンキラー副チーフ選出時のチェロキー・ネイションにおける選挙法については Cherokee Nation [1978]; Cherokee Nation [1982] を参照のこと。
63. Mankiller and Wallis [1993: 242]; Agnew [2001: 215-16]。

64. Mankiller and Wallis [1993: 242]。
65. Mankiller and Wallis [1993: 243]; Agnew [2001: 216-17]。
66. Janda [2007: 97]。
67. Agnew [2001: 217]; Mankiller and Wallis [1993: 244]。なお、副チーフにはチェロキー議会議員の中からジョン・ケッチャー (John Ketcher) が選出され就任している [The 1976 Constitution of the Cherokee Nation: art. VI, sec. 4, p. 6; Mankiller 2004: 151-53]。
68. Janda [2007: 100]。
69. Mankiller and Wallis [1993: 247]。
70. Janda [2007: 114-15]; Mankiller and Wallis [1993: 248-49]。
71. Janda [2007: 98, 100-1]; Mankiller and Wallis [1993: 248]; Agnew [2001: 219-20]。
72. Wallace [1988: 68-69]; Edgar [1988: 41]。
73. "Mankiller: Getting back to Business." [1991]。
74. Pearson [19 August 1990]; Agnew [2001: 222-23]。まずアーカンソー州フォート・スミスに程近いロランド (Roland) で、その後タルサとサイロム・スプリングズ (Siloam Springs) の2ヶ所でピンゴ場が開設された [Mason 2000: 209, 287n119]。
75. Pearson [11 November 1990]; "Mankiller Announces Re-Election Plans." [1991]。
76. Mankiller and Wallis [1993: 251-54]; "Mankiller Facing Kidney Transplant." [1990]; "Mankiller to Get New Kidney." [1990]; "Cherokee Chief out of Hospital." [1990]。
77. "Abdominal Pain Puts Cherokee Chief in Hospital." [1993]; "Cherokee Chief Released from Boston Hospital." [1993]。
78. Mankiller and Wallis [1993: 260]; Martindale [1994]。
79. Louie [1996: B5]。
80. Martindale [29 February 1996]; Martindale [5 March 1996]; Winslow [1996]; "Mankiller Begins Six Months of Chemotherapy for Cancer." [1996]; Martindale [20 September 1996]。
81. Martindale [3 July 1998]; Mankiller [2004: xxix]。
82. Martindale [1999]。
83. Mankiller [2004: 191]。
84. Myers [1998]。
85. Perdue [1998]; McLoughlin [1986]; McLoughlin [1984] を参照のこと。

## 参考文献

- Agnew, Brad. "Wilma Mankiller: Cherokee." *The New Warriors: Native American Leaders since 1900*. Ed. R. David Edmunds. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 2001. 211-36.
- Carter, Kent. *The Dawes Commission and the Allotment of the Five Civilized Tribes, 1893-1914*. Orem, UT: Ancestry.com, 1999.
- Cherokee Nation. Legislative Act #1-78. 6 May 1978.
- . . Legislative Act #2-82. 11 October 1982.
- Edgar, Joanne. "Women of the Year: 1987." Ms. 16. 7 (January 1988): 41.
- Fixico, Donald L. *Termination and Relocation: Federal Indian Policy, 1945-1960*. Albuquerque: University of New Mexico Press, 1986.
- . . *The Urban Indian Experience in America*. Albuquerque: University of New Mexico Press, 2000.
- Janda, Sarah Eppler. *Beloved Women: The Political Lives of LaDonna Harris and Wilma Mankiller*. Dekalb, IL: Northern Illinois University Press, 2007.
- Johnson, Troy, Duane Champagne, and Joane Nagel. "American Indian Activism and Transformation: Lessons from Alcatraz." *American Indian Activism: Alcatraz to the Longest Walk*. Eds. Troy Johnson, Joane Nagel, and Duane Champagne. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1997. 9-44.
- Kvasnicka, Robert M. and Herman J. Viola, eds. *The Commissioners of Indian Affairs, 1824-1977*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1979.
- Louie, Elaine. "Chronicle: Wilma Mankiller, Former Cherokee Chief, Takes It Easy at Dartmouth." *New York Times* (ProQuest Historical Newspapers) 3 January 1996. B5.
- Mankiller, Wilma. *Every Day Is a Good Day: Reflections of Contemporary Indigenous Women*. Golden, CO: Fulcrum Publishing, 2004.
- . . "Keeping Pace with the Rest of the World." *Southern Exposure* 13. 6 (1985): 72-76.
- Mankiller, Wilma and Michael Wallis. *Mankiller: A Chief and Her People*. New York: St. Martin's Press, 1993.
- Mason, W. Dale. *Indian Gaming: Tribal Sovereignty and American Politics*. Norman: University of Oklahoma Press, 2000.
- McLoughlin, William G. *Cherokee Renascence in the New Republic*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1986.
- . . *Cherokees and Missionaries, 1789-1839*. New Haven and London: Yale University Press, 1984.
- Perdue, Theda. *Cherokee Women: Gender and Culture Change, 1700-1835*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1998.
- Prucha, Francis Paul. *The Great Father: The United States Government and the American Indians*. 2 vols.

Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1984.

Schwartz, Melissa. *Wilma Mankiller: Principal Chief of the Cherokees*. New York: Chelsea House Publications, 1994.

Verhovek, Sam Howe. "The Name's the Most and Least of Her: At Work with Chief Wilma Mankiller." *New York Times* (ProQuest Historical Newspapers) 4 November 1993. C1+.

Wallace, Michele. "Wilma Mankiller." Ms. 16. 7 (January 1988): 68-69.

## オンライン資料

The 1976 Constitution of the Cherokee Nation. *The 1999 Constitution of the Cherokee Nation: A Review and Comparison between the 1976 and 1999 Constitutions of the Cherokee Nation in Preparation for the Ratification Vote on July 26, 2003*.

<<http://www.cherokee.org/TribalGovernment/Executive/CCC/ccc1999Changes.pdf>>  
(accessed 17 Feb. 2008)

難病情報センター. 「多発性嚢胞腎」

<<http://www.nanbyou.or.jp/sikkan/069.htm>> (accessed 12 Feb. 2008)

———. 「重症筋無力症」

<<http://www.nanbyou.or.jp/sikkan/049.htm>> (accessed 12 Feb. 2008)

以下に挙げる *Tulsa World* の記事に関しては "Tulsa World Article Search" で検索可能。

<<http://www.tulsaworld.com/mm/services/articlesearch.aspx>>

"Abdominal Pain Puts Cherokee Chief in Hospital." *Tulsa World* 6 June 1993.

"Cherokee Chief out of Hospital." *Tulsa World* 28 June 1990.

"Cherokee Chief Released from Boston Hospital." *Tulsa World* 19 June 1993.

Colberg, Sonya. "Name's Sake: Wilma Mankiller Fulfills Legacy as Tribal Leader." *Tulsa World* 2 December 1996.

"Mankiller Announces Re-Election Plans." *Tulsa World* 16 March 1991.

"Mankiller Begins Six Months of Chemotherapy for Cancer." *Tulsa World* 27 March 1996.

"Mankiller Facing Kidney Transplant." *Tulsa World* 30 March 1990.

"Mankiller: Getting back to Business." *Tulsa World* 17 June 1991.

"Mankiller to Get New Kidney." *Tulsa World* 1 June 1990.

Martindale, Rob. "Chief Mankiller to Leave Post Next Year: It's Time for a Change, She Tells Cherokees' Staff." *Tulsa World* 5 April 1994.

———. "Disease Revisits Ex-Chief." *Tulsa World* 14 September 1999.

———. "Mankiller Basks in Homecoming." *Tulsa World* 20 September 1996.



———. “Mankiller Cancer Inoperable.” *Tulsa World* 5 March 1996.

———. “Mankiller Diagnosed with Cancer.” *Tulsa World* 29 February 1996.

———. “Mankiller to Have Second Transplant.” *Tulsa World* 3 July 1998.

Myers, Jim. “Mankiller Awarded Medal.” *Tulsa World* 16 January 1998.

Pearson, Janet. “Born to be Chief: Wilma Mankiller.” *Tulsa World* 11 November 1990.

———. “Tribal Governments Embark on New Era of Sovereignty.” *Tulsa World* 19 August 1990.

Winslow, Laurie. “Outlook Apparently Hopeful for Mankiller.” *Tulsa World* 5 March 1996.

